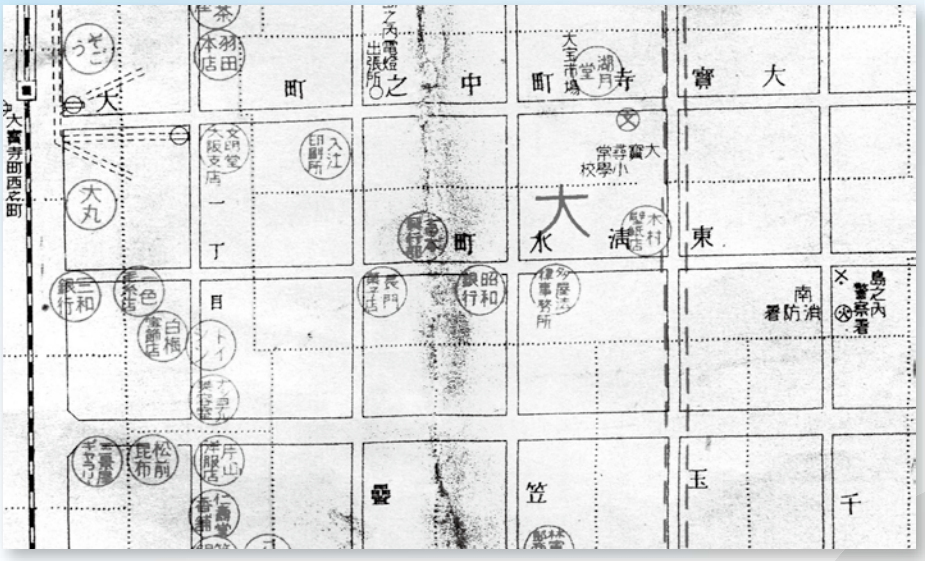
おおさか KEYわーど 第41回

地図で小説の舞台をたどってみると

いろいろ見えてくる大阪の街



「東清水町」の左に「吉本興行部」。左上は地下鉄心斎橋駅で、大丸の右側が心斎橋筋。
昭和13(1938)年「大大阪区勢地図 最新の南区」(創刊十五周年記念夕刊大阪新聞付録)より

骨太の社会派小説で知られる山崎豊子さんが亡くなられた。享年八十八歳。『暖簾』『ぼんち』など大阪の商家を舞台とした作品で名声を確立し、『白い巨塔』『華麗なる一族』『沈まぬ太陽』など社会問題を抉る長編は、テレビや映画でドラマ化された。

感心するのが、大阪を舞台とした小説の舞台設定の巧みさである。大学での権力争いと医者のモラルを問う『白い巨塔』は、田宮二郎主演のテレビドラマが強烈だったが、原作では登場人物の住む町の設定が絶妙である。

主人公の財前五郎助教授は、病院を営む義父の財力で芦屋に住み、恩師ながら対立する東貞蔵教授は、大学病院長であった父のあとを継ぎ、同じ芦屋でも山手の豪邸に住んでいる。いまは大阪近郊も変わったが、鵜飼医学部長が宝塚、学内第三勢力を目指す野坂教授が南海沿線・浜寺(原作では諏訪ノ森駅付近)というのも、小説の連載開始の昭和38年を考えると、戦前から私鉄沿線に開発された高級住宅地のイメージがみごとに彼らの生き方を象徴している。

対照的に、厳正中立を旨とする病理学の大河内教授は、城下町でもあった高槻の「軒先の瓦がずり落ちそうになった」質素な家、誠実な里見助教授は大阪城に近い法円坂の官舎に住み、学究肌の二人の人柄を印象づける。

同様のことは、今年、生誕100年となる織田作之助の作品にも言える。『夫婦善哉』『世相』などに描かれた法善寺横丁、千日前、難波新地など、ミナミの町名は効果的に物語のイメージを喚起させる。

織田の『世相』を読み返して気がついたことがある。昭和15年頃の話として、主人公が小説のネタを求めて出入りする「ダイス」というスタンド・バーだが、道頓堀から太左衛門橋を渡って笠屋町を北上し、八幡筋(はちまんすじ)、周防町筋を越え、清水町(しみずまち)を左へ折れ、「心斎橋筋の一つ手前の畳屋町筋(たたみやまちすじ)へ出るまでの左側」にあったことになっている。心斎橋筋には近いが、小説ではミナミの花街や飲食店の雑踏からは少しはずれた感じだ。

戦前の地図で調べると、なんと「ダイス」の向かいと思われる位置に「吉本興行部」と記されてあった。現在の吉本興業である。地図にある笠屋町(かさやまち)に設立され、有名な秋田實や、戦後に織田作之助の句碑建立の発起人となる長沖一(ながおきまこと)など、文芸で活躍する人たちも所属し、織田も仲間たちとの交遊の中で、織田が小説の舞台にこの地域をとりこんだ可能性が見えてきた。現在の町名では、中央区東心斎橋1丁目16の街区の北側付近である。ところで、この辺りのバーが登場する別の小説をどこかで読んだと思っていたら、それが『白い巨塔』だった。

東教授と鵜飼医学部長の蜜月時代、新しい大学病院を建てるための密談を重ねたバーが「シロー」であり、所在がこの辺りなのである。大学の所在がキタに近く、顔が指すのをきらってミナミの隠れ家的な店を密談の場所に用いたのだろう。原作では、御堂筋を南にタクシーを走らせ、「清水町の角を二丁ほど東に入った」ところと記される。「清水町の角」は現在の大丸心斎橋店本館の西南の角、二丁ほど入ったところが織田がいう「畳屋町」の通りになる。

戦前の「ダイス」、戦後の「シロー」。むろん、どちらも虚構の小説の世界の話であるが、大阪が生んだ小説家、それも取材力のある二人が、町名の喚起するイメージを作品に取りこむことで、想像力の翼を存分に広げていることが分かって新鮮だった。

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室主任学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念　木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念　佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』(創元社)など。